

こうきんやく 抗菌薬 (抗生物質・抗生剤)

おひさまこどもクリニック



細菌などによる病気に効く

抗菌薬は細菌などによる病気を早く治したり、ときには重症な病気から命を救ってくれる薬です。

細菌による病気：溶連菌性咽頭炎、細菌性肺炎、マイコプラズマ肺炎、百日咳、細菌性腸炎、尿路感染症、急性中耳炎、急性副鼻腔炎（蓄膿症）、細菌性髄膜炎、とびひ、など



ウイルスには効かない

ふつうの「かぜ」はウイルスが原因なので抗菌薬は効きません。

ウイルスによる病気：かぜ症候群、インフルエンザ、ウイルス性胃腸炎、突発性発疹、風疹、おたふくかぜ、はしか、みずぼうそう、手足口病、ヘルパンギーナ、プール熱、など



抗菌薬をもらったら

最後まできちんと飲みきりましょう。症状がよくなったから、熱が下がったからといって、途中でやめてはいけません。



抗菌薬をとっておく？

抗菌薬をとっておいて次の病気のときたときにとりあえず飲ませる、というのが一番いいけません。病気のサインを中途半端に消してしまうので正しい診断ができず、病気をこじらせてしまうことがあります。



予防には使わない、長期には使わない

ふつうの「かぜ」のときに、肺炎や中耳炎を予防するために抗菌薬を飲む、というのはよくありません。効果がなればかりか体の中の菌のバランスが崩れたり、耐性菌ができたりして、かえって体に害になることさえあります。



抗菌薬の副作用

ときに下痢をすることがありますが、これはもともと腸の中にいる「よい細菌」までやっつけてしまうからです。治療が終われば下痢も治ります。

< 抗菌薬の適正使用について >

【説明】

急性気道感染症は自然軽快することが多いです。

風邪などのウイルス感染に抗菌薬は無効です。

抗菌薬は腸内の善玉菌を殺し薬剤性下痢を起こし、免疫力が低下する可能性もあります。

抗菌薬の乱用で耐性菌増加が社会問題になっています。

【指導】

安静と水分・栄養補給が大事です。

手洗い、(幼児以上はうがいやマスク着用)を励行しましょう。

数日経過しても改善ないときは再診してください。

高熱、咳・喘鳴、機嫌不良、食欲低下、睡眠障害など悪化したら再診してください。

< 抗生剤の使いすぎは良くないってほんとう? >

こどもの熱の9割はウイルス性で、ウイルスに抗生剤は効きません。“熱が出たらすぐに抗生剤”そんなことを繰り返していると、こどもの体に耐性菌(抗生剤の効かない細菌)が住み着いて、いざというとき抗生剤が効かない可能性があります。早く使えば良いというものではありません。全身状態が良ければ、風邪薬や解熱剤で様子を見てください。家に残っていた抗生剤を自己判断で使うことはお勧めできません。

どんなときに抗生剤が必要で、どんなときに要らないのでしょうか？

1. 中耳炎：症状の程度によります。軽症では必要でない例もあります。
2. 副鼻腔炎：黄色や緑の鼻汁が出ても、ほとんどは副鼻腔炎ではありません。一部の長引く重症例では抗生剤が必要なことがあります。
3. 気管支炎：気管支炎に抗生剤が必要なことはまれです。
4. 肺炎：細菌性肺炎やマイコプラズマ肺炎には抗生剤が使われますが、ウイルス性肺炎には抗生剤は無効です。
5. 咽頭炎、扁桃炎：殆どはウイルス性ですので抗生剤は要りません。唯一、溶連菌感染症だけは抗生剤が必要です。咽頭の迅速診断で分かります。
6. 風邪：風邪の原因はウイルスであり、ときに2週間も続くことがあります。風邪に抗生剤は効きません。対症療法(咳・鼻のくすり、熱さましなどの処方)をします。

感染症は変化しうる

ウイルス感染は、二次的に細菌感染を引き起こすことがあります。しかし、予防的な抗生剤投与は効果がないだけでなく、耐性菌の感染の原因になるかもしれません。もし、症状が長引き悪化した場合は、主治医に相談して、必要な治療を受けるようにしてください。

以上、アメリカ小児科学会のリーフレットより一部改変

2018.04.01 おひさまこどもクリニック